＜前回：脳・心・人間・倫理１＞

（１）議論の整理

０．これまでの議論。「脳／こころ」：社会脳へ　→　人間学へ

１．人間学から倫理へ：マイケル・スペジオ（Michael L. Spezio）「社会脳科学と有神論的進化――相互主観性、愛、社会的領域」。社会脳研究から神学的人間学へ。

３．トマスの愛論、そしてボンヘッファーの神学的人間学。

４．脳神経科学における模倣（simulation）、共感（compassion）に関する実験から愛へと議論を進める際に、トマスにおける共感と愛との区別に言及。この議論を進める上で、スペジオはさらにザグゼブスキイの文献（Linda Trinkaus Zagzebski, *Divine Motivation Theory*, Cambridge University Press, 2004.）を参照している。

キリスト教における愛の問題は、社会脳研究との重要な接点となる。

（２）ボンヘッファーの神学的倫理学

５．ボンヘッファーの未完の『倫理学』。（「形成としての倫理学」（Ethik als Gestaltung）

『倫理学』は晩年のボンヘッファーがいわばライフ･ワークとして取り組んだテーマ。死後、1949 年にＥ・ベートゲによって出版。ボンヘッファー全集第 6 巻として刊行。

Dietrich Bonhoeffer, *Ethik*（hrsg.v. Ilse Tötd, Heinz Eduard Tödt, Ernst Feil und Clifford Green）, Chr. Kaiser, 1992.

６．現代における理論的体系的な倫理学の困難さ。善と悪の両義性の状況。

目指されるべき具体的倫理学（eine konkrete Ethik）は決疑論や形式主義を超えるものとして構想される（Bonhoeffer, 1992, 87）。

７．現代は悪人と聖人のいずれもが公然と姿を現して活動しているが、しかし、悪人は単純に悪人であるわけではなく一種の徳を備えている。悪人の身にまとう徳はまさに根本的な悪を指し示すものであるが、しかし、不正義が正義と不可分になっている現実は、理論的に正義を問うことを困難にする。

８．堕落（Fall）よりも無限に深刻な「背反」（Abfall）、つまり、「背反者の輝ける徳」という深い夜の闇が存在する（ibid.,　63）。よりひどい悪を避けようとしてそれが悪であることを知りながら容易に悪に同意するという悲劇、善と悪の両義的事態。

９．具体的倫理学を構築するには、この闇を見通す洞察が必要。

この洞察が「単純さ」（Einfalt）と「賢さ」（Klugheit）から構成され、それらが一つに結びつけられる必要性を指摘（ibid., 67）。

善や正義といった概念すべてが混乱しているときに、神の真理にのみ単純に目をとめることが「単純さ」の意味であり、現実を神において見ることが「賢さ」である。

10．現代に求められる倫理的洞察とは「神と現実とを自由にされた目で見る」（ibid.,　68）ことによって可能になる。「蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい」（マタイ 10.16）との聖句に言及。

11．では、この洞察を得るにはどうしたらよいのか。

ボンヘッファー：われわれが、単純さと賢さが同時に現実化されている場所から、つまり、「神とこの世の現実とが相互に和解された場所（Ort）」から神と世界を見なければならない。

12．キリスト教信仰はこの場がイエス・キリストにおいて具体化されたと確信し証言することにより存立する。キリスト教倫理は、そして倫理学自体も、「この人を見よ（Ecce homo ）」においてその土台が獲得できると主張されるねばならない。

13．「神人イエス・キリストという和解者の形（Gestalt）」（ibid.,　69）は、人間そのものの形

であり、これが両義的な現実の中で、人間にとっての善悪を見通す唯一の場所（倫理の基盤）となる。

このキリストの形において人間を見るとき、人間を過度に理想化し偶像化するという誤りと、人間を過度に軽蔑するという誤謬とを同時に避けることが可能になる。

15．倫理学の基盤としての形・形成という問題。

「『形成』とは、まず第一に、イエス･キリストがかれの教会において形を獲得することを意味する。……事柄自体のより深くより明確な関連において、新約聖書は教会をキリストの体と呼んでいる。体は形である。」（ibid., 84）

16．教会という共同体こそが具体的倫理学の構築にとって決定的な場であること、これがボンヘッファーにおいて注目すべき洞察。

17．こうした洞察は新約聖書、特にパウロに遡る。

パウロにおける「体」というメタファーの使用。

キリスト教共同体形成という課題（第一コリントなど）。パウロにおいて、この共同体論はまさに倫理的問いだったのであり、パウロはストアの倫理学ときわめて近いところに立っている。Michelle V. Lee, *Paul, the Stoics, and the Body of Christ*, Cambridge University Press, 2006.

18．「パウロとストア主義との関係」に遡る倫理的共同体的なテーマが、ボンヘッファーにおいて再度、キリスト論の視点から取りあげられている。

共同性としての体の形という論点は、スペジオがボンヘッファーの神学的人間学の中心に位置づける「神の像」（imago Dei）の議論、そして三位一体論というキリスト教神学の核心にまで到達する。

19．モルトマン『三位一体と神の国』: キリスト教神学の伝統では三位一体を理解するための類比として、個別的位格と共同性の二つの範疇が用いられてきた。

22．ボンヘッファー『倫理学』。「イエス・キリストの形による西洋の統一」（Bonhoeffer, 1992, 100）という遺産が二つの王国に解体し、世俗化の過程が続いて生じたとの事態。

↓

西洋のキリスト教的伝統が直面する問題を、神の像の社会性の復興において、つまりキリスト教的共同体の形成として解決しようとする試み。

こうした内容を有する教会論を神学の中心的な主題として位置づけている。

（３）エコ・フェミニズムの場合

24．リューサーのエコ・フェミニスト神学。

リューサーのフェミニスト神学における位置づけや主張の概略については、芦名定道「現代思想とキリスト論」（水垣渉・小高毅編『キリスト論論争史』日本キリスト教団出版局、2003 年、529-567 頁）を参照。

25．心身二元論（身体から実体的に分離される魂）に基づく伝統的な人間理解への批判。

心身二元論が、魂・理性という男性原理による身体・自然（女性原理）の支配を理論的に根拠づけるものとして機能している。

しかし、二元論的な人間理解に基づくこの支配は、実は、身体的なもの・女性的なものへの恐怖の裏返しであり、それは、有限性・可死性からの脱出をめざすという仕方における魂の不死性の追求となって現れる。

30．伝統的な個人主義化された心身二元論への対案をキリスト教思想として提出するために、エコ・フェミニスト神学はこれまで聖書思想の脱構築という方法論を用いてきたが、脳神経科学、特に社会脳研究は、こうした理論構築を補強するものとして位置づけうる。

14．脳・心・人間・倫理２

＜概論講義・前期：行為と時空の形態化＞

・宗教とは、具体的で特殊な仕方での「生の形態」である。

１．サクラメント(sacramentum)：「不可見の神・神の恩恵の具体的徴」

２．ローマ・カトリック教会における７つのサクラメント（プロテスタント教会①⑥のみ）

①洗礼（baptism）　②堅信（confirmation）　③叙階（holy orders）

④婚姻（matrimony）⑤終油（extreme unction）⑥聖餐（eucharist）⑦悔悛（penance）

３．キリスト教的な時間秩序（時の形態化）：ローマ・カトリック教会の７つのサクラメントによって、キリスト教徒の一生を図式化すると次のようになる。

・［一生］　誕生→①→②→「③ or ④」→⑤→死（→復活→永遠の命 or 第二の死）

・［一年］　教会暦（三大祭りによって一年の時間にリズムが与えられる）

・［一週］　聖日→週日→聖日（聖→俗→聖）

キリスト教の信仰に生きる＝質的にリズム化された時間感覚（時間経験）をもって生活すること＝時間の形態化

４．「宗教とは生（生活、生涯、生命）の形態化である」。

三つの相

信仰	→	究極的関心・自己同一性	→	行為の形態化
聖なるもの	→	ヒエロファニー	→	空間の形態化
儀礼	→	ヒエロファニー	→	時間の形態化

↓

・個と共同体（我と我々）との循環関係

では、意味世界はどのような仕方で構築されるのか。

知識社会学（バーガー＋ルックマン）：個人と社会の弁証法

外在化（表現）／客体化（疎外）・制度化／内在化（社会化）

→　日常的現実性の構築から見た宗教：聖なる天蓋

・「形」「形態化」は、個と共同体の循環関係において構成される。

↓

以上は、「脳・心」の議論によって、どのように具体的に理論構築できるか？

（１）心の病をめぐって、再度、病の問題へ

１．病・医療の問題と社会脳研究。

・アレキシサイミア（失感情症）や自閉症スペクトラム。

前者が自分自身の情動・感情状態への「気づき」「言語化」における障害であるのに対して、後者は社会的な対人交流・コミュニケーションにおける障害という点で対照的であるが――前者は「自分のことがわかること」に関わる病であり、後者は「他人のことがわかること」に関係した病である――、人の心を理解するという点をめぐる障害という特性を両者は共有している。

２．「自分のことを理解するには、自分の外に視点を置かなくてはならない。その際に自分を理解する手法は、他人を理解する手法に近づくことになる。」（守口善也「アレキシサイミアと社会脳」、苧阪直行編『自己を知る脳・他者を理解する脳――神経認知心理学からみた心の理論の新展開』新曜社）

２．ミラーニューロン（サルにおいて見つかった、他者の運動を自分の頭の中で模倣・再現するかのように反応するニューロン＝自分と他者の運動の自動的なマッチングシステ

ム）などと関連づけるなど。
３．キリスト教思想における、自己理解と他者理解との共通性という問題。
　ボンヘッファーが『共に生きる生活』で示した、「われわれは、ただ交わりの中にいる時にのみひとりであることができ、ただひとりであるもののみが交わりの中で生きることができる」との洞察。
４．「不適切な養育」（マルトリートメント）による子どもの脳の損傷がうつや統合失調症などの病を引き起こすという指摘。
・「不適切な養育」と訳されるマルトリートメント（child　maltreatment）は、一九八〇年代になり児童虐待――身体的虐待、性的虐待、ネグレクト、心理的虐待――をより生態学的な観点から捉える際に用いられるようになった用語であり、こうした虐待が脳に傷を残すことは小児精神医学において問題となっている。
・「精神的なマルトリートメントを受けても、外傷は残らないし、死に至ることもない――。本当にそうでしょうか？　・・・『こころ』、すなわち『脳』には大きな傷が残ります。そしてその傷の影響は、じわじわと子どもに現れてきます。・・・研究では、マルトリートメントの内容（種類）に応じて、脳の別の部位も変形することがわかっています。その結果、うつ状態になる、他人に対して強い攻撃性を示すようになる、感情を正常に表せなくなるといった症状が出てくる場合があります。・・・最悪の場合、犯罪や自殺に走る場合もあります。」（友田明美『子どもの脳を傷つける親たち』ＮＨＫ出版新書）
５．子どもの虐待で問題になるのは、その子どもの身近にいる大人たち。
・虐待は、キリスト教とも無関係ではない。
　キリスト教をはじめとして、宗教においては、その活動が密室で行われることなどによって、しばしば性的ハラスメントや身体的精神的な暴力が行われてきた。
　キリスト教においても、虐待やハラスメントが脳に損傷を与えることについて、無関心ではすまされない。脳科学の問題は、心や身体の病を通して、キリスト教の実践的営み、そして実践神学の問題領域と結びついている。

（２）自己・人格とは
６．形・形態としての人格性、個（個人）と共同（社会）との相互関係。相互関係は、身体を媒介とする。
・「自己は他者なしには考えられないし、他者も自己なしでは考えられない。自他の区別があるということは、自他の間には境界があることを示唆している。自己と他者のかかわりを捉えるのに、まず自己があって、そこから他者が生まれるという立場と、他者があってこそ自己が生まれるという２つの立場がある。いずれの場合も自他の社会的相互作用が前提となる。他者の中の自己・・・相互主観性の形成と、自他の境界問題・・・。」（苧阪・越野、2018、45）
「自己についての２つの見方について見よう。自己は便宜上、身体的自己(bodily　self)と心的自己（mental　self）に分けられるだろう。自分の身体は自分のコントロールしているという自己帰属の感覚は、自分の身体の保持感と操作感が共に脳内で同期的に働く結果であり、身体的自己という概念がここから導かれる。」（47）
７．脳・身体・自己
・恩蔵絢子『脳科学者の、母が、認知症になる――記憶を失うと、その人は〝その人〟でなくなるのか？』河出書房新社、2018 年。
「人格にまつわる問題」（49）

８．12/3 の講義から。

「21.「クローニングによって――同じ遺伝子を持つものとして――生まれる人間も、いわば伝統的な出産方式で生まれる人間と同様に、神の前で（coram Deo）生きている人間であり、神から恵みを授かるべき存在である。すなわち、人間のアイデンティティは人間と神の関係においてるものであり、決して遺伝子によって決定されるものではない。」（金、2009、174）

22．人間の魂にその座を持つアイデンティティや尊厳は、人間の自然的属性によって決定されるものではなく、人間と神の関係へと開かれており、神の恩恵の事柄として理解することができる。

人格：個体性であるとともに、あるいはそれに先だってまず関係性において、他者（神、そして他の人間や生物）との関わりによってもたらされる贈与として理解される。

Joachim Ritter und Karfried Gründer（Hrsg.）, *Historisches Wörterbuch der Philosophie. Band 7*, Schwabe & Co. AG Verlag, 1989.

人格は、コミュニケーション（言語的コミュニケーションにかぎらず）を通して他者と関係構築する能力との関連において論じることが必要。」

＜参考文献＞

１．友田明美『子どもの脳を傷つける親たち』ＮＨＫ出版新書、2017 年。
２．守口善也「アレキシサイミアと社会脳」（苧阪直行編『自己を知る脳・他者を理解する脳――神経認知心理学からみた心の理論の新展開』新曜社、2014 年）。
３．苧阪直行・越野英哉『社会脳ネットアーク入門　社会脳と認知脳ネットワークの協調と競合』新曜社、2018年。